

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2670700349		
法人名	ユニマツリタイアメントコミュニティ		
事業所名	嵯峨野ケアセンターそよ風 3F		
所在地	京都市右京区嵯峨釈迦堂藤ノ木町19-1		
自己評価作成日	令和5年4月17日	評価結果市町村受理日	令和5年6月28日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。

基本情報リンク先	https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/26/index.php?action=kouhyou_detail_022_kani=true&JigyosvoCd=2670700349-00&ServiceCd=320&Type=search
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	一般社団法人 京都ボランティア協会
所在地	〒600-8127 京都市下京区西木屋町通上ノ口町上ル梅湊町83-1「ひと・まち交流館 京都」1階
訪問調査日	令和5年5月17日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

当センターは京都嵐山からやや北にあがった、自然に囲まれた風情のある静かな地域に位置しています。利用者様がゆっくりと穏やかに過ごせるよう、その人の持つおられる能力を考慮し、手助けを必要とする部分を支援することを心がけています。また、清涼寺で行われるお松明、五山の送り火鑑賞会、嵯峨祭の見学、京都マラソン見学といった季節にあったイベントがセンターで過ごされる利用者様の日常生活に楽しみになっており生活の質の向上に繋がっています。コロナ禍における感染予防対策としては、手洗い、消毒、マスクの着用等行いつつ、コロナ前のような面会をして頂いたり、イベントの機会を増やしております。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

当事業所は京都有数の景勝地に位置し、隣接の嵯峨釈迦堂の四季のたたずまいや静けさは、利用者の心の拠り所として日々の暮らしに息づいています。3ユニット、総勢27名の当事業所は、新型コロナが5類に移行する少し前から、リスクに配慮しながら、本人や家族の念願である、居室での面会や散歩、家族との外食、外泊を再開してきました。ボランティアによる音楽会も今年から再開しました。地域活動では、3年ぶりに嵯峨釈迦堂のお松明に多くの利用者が参加し、伝統行事を楽しみました。また、広い駐車場を活かし、嵯峨まつりの鉢立の場所を提供し、地域の行事の継承に一役買い、それを間近に見る利用者の喜びもひとしおでした。状況を見ながら、今後はさらにボランティアの受け入れを増やして行く予定です。一方、定例の運営推進会議では、積極的に事故の開示と分析、広報紙の配布などをおこない、事業の透明性を高める取り組みもされています。さらに法人は毎年利用者家族と職員向けにアンケートを実施し、双方の意向を事業運営に活かしています。そして、事業所で最期を迎えたいという本人や家族の要望に応え、医療関係者と連携して看取りもおこなっています。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働いている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	朝礼にて毎朝、理念を唱和し、共有している。	事業所理念「穏やかで安らぎのある暮らし、心遣いや気配りのある生活、ゆったりと自由な時間、地域と生きる私たち」は1階の事務所に貼り、毎朝朝礼時に唱和している。事業所理念は職員間で見直し、継続と決めている。	事業所理念は事業所の方向性そのものであり、月刊のそよ風便りにも載せて、広くご家族への周知を図られては如何でしょうか。
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	そよ風便りを月に1回地域へ向け、発行している。発行ペースと内容を以前より充実させています。面会の機会が減っている中で普段の様子を知って頂く重要な内容となっています。	町内会に入り、ブロック長(3町内の長)を受け持ち、保健委員も歴任して献血の手伝いをするなど、実際に自治会活動に携わっている。嵯峨釈迦堂の伝統行事への参加、嵯峨まつりの銚立の技術継承のため、広い駐車場を提供して町内の後進の育成に寄与するなど、住民としてできることをしている。五山の送り火の鳥居の地元町内として、護摩木を奉納している。嵯峨小学校校区安心安全マップに、地域の見守り隊の一拠点として事業所が登録され、必要時に協力する体制を整えている。また、事業所内でもコンサートの再開など、ボランティアとの交流も再開しつつある。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	コロナ禍以降、機械を作るのが難しくなっている。今後柔軟に増やしていければと思う。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	施設の行事、事故、課題等を報告・相談させて頂き、他施設の立場や地域の方からの視点で意見を頂き、サービス向上に活かしている。	運営推進会議には、嵯峨自治連合会会長、嵯峨社会福祉協議会会長、嵯峨民生児童委員協議会会長、地域包括支援センター職員等などが出席し、入退去状況、行事・事故報告などをおこなっている。出席者からはコンサート再開に対する新型コロナ対策や転倒防止、地域行事に関する意見などが出ている。議事録は出席者や家族に配布している。	やっと対面で双方向での会議が開催できるようになりました。今後は利用者本人や家族などにも参加を呼びかけて、より活発な会議運営をされるよう期待します。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	地域ケア会議に参加したり、役所に事故の報告書を直接届けたり、ケアマネ連絡会に参加したりして、協力関係を築くよう取り組んでいる。	地域の自治連合会会長や医師、地区の社会福祉協議会など多機関・多職種の集まる地域ケア会議に参加し、困難事例や、各方面からの問題提起などを討議している。行政に運営推進会議議事録を持参し、事故報告にも出向いている。昨年7月の新型コロナクラスター、1月の陽性者発生の折は市や保健所と連絡を取り、検査キットや衛生用品の支給を受けるなど、必要時に連携している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束を目的とした行為はしていない。玄関は防犯上オートロックとしている。ユニットの入り口に手動の鍵は概ね開錠し、入居者様の状況に合わせて一部施錠する等工夫している。	身体拘束廃止・高齢者虐待防止委員会を定期的 に開催し、議事録は全職員に回覧している。年2 回、全体会議の後に全職員への研修をおこない、 レポートの提出を課している。日々の言動やケア への振り返り、小痣や不明傷の検証などはフロ ア会議や全体会議で常時話し合っている。セン サーや眠りスキャン使用の方はケアプランにあ げ、定期的なモニタリングと家族の承認を得てい る。各階の窓は転落防止のため15センチ以上は 開かないようにし、1階の玄関は施錠しているが、 各階の入口の出入りはほぼ自由である。帰宅願 望の強い方には、話しを聞いたり、庭を一緒に歩 いたりして気分転換を図っている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法につ いて学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内 での虐待が見過ごされることがないように注意を 払い、防止に努めている	全体会議で学ぶ機会を設けている。互いに 注意し合えるよう、職員同士の関係を良く し、風通しの良い雰囲気作りに努めている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年 後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要 性を関係者と話し合い、それらを活用できるよ う支援している	全体会議で学ぶ機会を設けている。まだ十 分とは言えないため、さらに職員の知識を 増やしていきたい。制度を利用されている利 用者様の対応を通じて学んでいる部分もある。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者 や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を 行い理解・納得を図っている	入退居時に面談をし、不安や疑問点なども 伺い説明をさせて頂き、理解して頂けるよう 努めている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員 ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを 運営に反映させている	センター内では毎月のフロア会議、三役会 議、全体会議があり、その中で利用者や家 族の意見について共有、相談できている。 話合った結果を迅速にケアに繋ぎ込んでいる。	1階の意見箱には意見は入っていない。法人本 部より家族宛に毎年アンケートが届き、集計結 果は法人経由で事業所に届く。また、面会時 や電話で家族意見を聞いている。面会の要 望が多く、予約制で居室での面会、本人と の散歩などを行っている。部屋のポータブル トイレの匂いに関する意見があり、脱臭剤使 用とこまめな廃棄で改善した例がある。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見 や提案を聞く機会を設け、反映させている	各種会議での職員からの意見共有、日常 的な聞き取りから意見や提案を吸い上げて いる。	センター長や管理者も現場に入り、随時 意見を聞き、会議以外に、センター長の 個人面談や法人のアンケートでも意見や 要望が言える。設立後20年以上経過し、 設備面の補修や作業分担などへの意見が 多い。当日勤務の職員全員を分かって おくために、毎出勤時に各階に挨拶に行 くという職員からの提案があり、実践 している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	人員補充など職場環境の整備に向けて努力している。会社としてリフレッシュ休暇を導入し環境・条件の整備に努めているが、十分に活かしていない部分もある。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	法人内外の研修を受ける機会を設けているが全員が対象ではないので、事業所独自で全体会議の場でも研修を行っている。他、ユニット内でチームとして新人を育てていく環境を整えたり、個人的にも研修に参加できるように案内している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	社内での事業所間交流の機会は各種会議等、人員不足の際のヘルプフォローで機会を作れている。他法人との交流は充分とは言えない。		
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居前の実調面談にてご本人とお会いし、思いに耳を傾けている。入居後もご本人からよくお話をお聞きし少しでも不安を和らげるよう職員間で情報を共有しご本人の安心に繋げるよう努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居相談の段階から、できるだけ多くの情報を聞き出し信頼関係の構築に努めている。担当ケアマネとの情報交換も欠かさないよういしている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	入居を検討された経緯、何が一番困っているのか、何が一番不安なのか、等を聞き取り、最善の支援ができるようにしている。他拠点の別サービスとの横の繋がりがあるので柔軟に対応できている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	一緒にお茶を頂いたり会話したりしながら、一日を過ごして頂いている。できることはして頂いて、できるだけ自分で決められるように支援している。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	可能な限り家族のお話を聞くように努めている。支援の仕方についても変更がある時は家族と共有しながら進めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	手紙、お届け物等はお本人にお伝えしている。友人、知人の面会や馴染みの場所への外出は現状充分とは言えない。	電話での交流や毎月のそよ風便りを家族に送り、情報を届けている。友人への年賀状の返信を手伝っている。散歩途中近所の邸宅の庭を眺め、お寺周辺の豊かな自然に触れ、写真を撮るなどしている。事業所横の農園の柚子、レモン、ミカンの収穫を楽しむ。毎日ラジオ体操を日課としている方もある。塗り絵や新聞購読などの継続、洗濯物畳みなど家事の継続、墓参りや冠婚葬祭への出席、自宅への外出・外泊、選挙に行くなど、馴染んだ生活の継続を支援している。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者様同士の会話によく耳を傾け、関係を把握し、個々の性格を見極め、職員で意見を共有し、利用者様それぞれが本人らしさが出せるよう支援している。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退居後であってもイベントをお手伝い等参加して下さるご家族もおられる。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	常に把握に努めている。ご自身で思いを表すことが困難な場合が少なくないが、利用者様の様子や発せられた言葉などを記録に残し、カンファレンスで本人本位の視点から職員で話し合っている。	センター方式のC-1-2シートを作成し、本人の思いを記録していたが、全員のものはできていない。フロアー会議や日々の申し送りノートで情報を共有し、結果を6か月ごとのアセスメントに反映させている。イベントの時は利用者の希望を聞き、誕生日にもしたいことや食べたい物を聞き実現している。実家の墓に参ったり、屋外の好きな方とは事業所周辺を散歩するなどしている。	認知症対応型共同生活介護計画書1表の、「利用者及び家族の生活に対する意向を踏まえた課題分析の結果」欄に“ご本人の思い・求めている事”の記載のないものがあります。ケアプランの原点ですので、記載が望まれます。
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居前・入居後ともに、ご本人やご家族や以前の施設等から情報収集をし、また、入居後もご本人からお聞きしたことを職員間で共有し、ご本人らしい生活をして頂けるよう努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	日々の一人ひとりの様子を、申し送りノートや個別の経過記録へ記載したり、口頭で申し送ったりすることで職員全員が把握できるようにしている。また、気になったことは「気づき」としてノートや口頭で共有している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	介護計画を作成する際に、職員でカンファレンスを行い、ご本人のしたい事は何か、その為に何を支援すべきか、ご家族の意向も含め話し合っている。家族や連携機関の方のカンファレンスへの参加が課題となっている。	サービス担当者会議により、認知症対応型共同生活介護計画書の原案を検証しているが、会議に利用者又は家族の参加はなく、介護職以外の専門職の関わりでの記述も乏しい。計画はモニタリングの後6か月ごとに更新し、家族に説明して承認を得ている。急激な変化に伴う計画変更や認定期間満了があれば6か月以内にも見直し、更新している。	日々の記録一覧(支援経過)から利用者の姿や思いが見えません。食事・排泄・入浴の記録以外に利用者とのやり取り、利用者の様子なども記録されるよう期待します。また、サービス担当者会議録や計画書には、医師・看護師・歯科医などを医療従事者として一つに括らず、各々の役割を明記し、チームケアの実態を見える化されるようお奨めします。
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の様子や対応を記録し申し送り、情報共有している。職員は、気づきがあった時にその場の職員同士話し合いケアの工夫をしており、その方にとってのよりよいケアの実践と見直しを日々行っている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	日々の業務フロー・ケアプランは決まっているがその日によって利用者様の状態が異なることも多いので、職員がその場で判断し臨機応変に対応している。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	コロナ禍以降地域との繋がりが薄くなっていたが、制限も緩和されており、様々な形で地域と触れ合っていきたいと考えている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	提携病院(西京都病院、太秦病院)と連携し、受診できる環境を整えている。かかりつけ医を希望されている方は受診を継続できるようにしている。	2個所の協力医療機関からの訪問診療がそれぞれ月2回あり、全員がいずれかの医師にかかっている。他科への受診は、家族や事業所が支援をし、事業所内での事故や病気は事業所が受診支援をしている。毎週歯科医師の訪問診療と口腔ケアの指導がある。訪問看護師が毎週来所し、24時間オンコール体制も取っている。必要に応じて訪問マッサージも利用できる。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	提携病院の往診(隔週)や訪問看護(週1回)の際に随時相談し、指示を頂き対応している。24時間相談できる状態にあり実際に行っている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	病院やご家族と連絡を取り情報交換を行っている。また退院後も病院側からサマリーを頂き、退院後の生活に支障のないようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居時や早い段階からご家族に終末期について考えて頂くよう促したり話し合いの場を設けたりしている。また、提携病院とも話し合いの場を設け、医師、看護師、ご家族、場合によっては職員も含めて終末期のケア方針を共有している。	契約時に「重度化した場合の指針・看取り対応に関する指針」を示し、本人や家族に説明し、同意を得ている。看取り希望の方とはターミナル期に改めて家族、医師、他の関係者間で話し合い、状態の推移に応じて随時医師と意向同意確認書を交わしている。ターミナル研修を実施し、参加できない職員は資料を読み、報告書を提出している。この1年で7名を看取り、思いに沿った看取りができたと言族に感謝されている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	十分な訓練の機会は用意できていない。実際の経験を積むことで実践力を付けていっている状況。対応に関しては定期的に職員間で確認し合っている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	定期的に消防訓練を行っており、消防署の方にも来て頂いている。全員が同時に訓練を受けられないので受ける人数や訓練の機会を増やしたいと思っている。	年2回の消防・防災訓練のうち1回は夜間想定で、通報・避難誘導・消火器訓練をおこない、消防署の立ち合いもある。利用者は踊り場に避難している。備蓄は3階倉庫に水や非常食など1週間分を備え、賞味期限内に取り替えている。非常電源も備えている。自然災害は水害を想定して3階に避難しているが、この1年はおこなえていない。AEDは別の日に講習している。地域への呼びかけなどはできていない。	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	言葉遣い、接遇マナーについて全体で勉強会をしたり、チェックリストにて自己点検、それをユニット会議で確認し合ったりすることで共通意識を高めている。	虐待防止の研修をおこない、本社からも匿名で各個人が自己評価をするシステムが届く。さらに、各職員に虐待の芽チェックリストを渡し、振り返りを促している。他室に入ったりのぞかれたりする利用者があり、本人不在時は施錠し、在室時はドアを閉めるなどの配慮をしている。朝礼は事務所でおこない、利用者情報を職員間で大声で話さないようにするなど、日頃から気を付けている。職員の気になる言動はその場で注意したり、リーダー会議で話したり、身体拘束委員会で話し、議事録を回覧して全職員への周知を図っている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	その方その方に応じて、決めていただく、選んでいただく、こちらが察知する、などして支援している。その方の表情などをよく観察して思いに添えているのか考えるようにしている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	利用者様お一人おひとりによって、またその日その時によっても、どのように過ごされたいか異なることを職員全員が理解し、希望にそった支援をするよう努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	服選び、整髪など支援している。月に1度の美容院でカットしている。化粧や外行きの洋服を楽しむ機会はあまり持っていないので増やしたい。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	今年から完全調理品を採用しており、職員が利用者に関わる時間を増やしている。季節の食材等は特定日にイベントとして召し上がっていただけるようにしている。	ユニットでご飯と汁物は作り、調理済の副菜を湯煎して使用している。刻み食は事業所で刻み、重度の方には別業者にムース食を注文し、普通食に近い形状で食事を楽しめるようにしている。誕生日には本人の希望する食事とケーキを提供し、行事食には特別メニューや、出前の寿司、他にハンバーガーや寿司のテイクアウトなども取り入れている。おやつにホットケーキなどを手作りすることもある。毎日10時にはコーヒーをたて、お茶を飲まない方にはスポーツ飲料などを提供している。できる方はテーブル拭きをされている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	毎日の食事水分の状況を記録、共有し、変化があれば食事水分の形態や量の変更等柔軟な対応をしている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	起床後と夕食後は全員行って頂けるように支援している。日中は口腔内に食べ物が溜まりやすい方などはその時々に応じて対応している。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	適切なタイミングでのトイレ誘導やパット交換を行い、自立支援やパットの不快感の軽減に努めている。特定の方専用の記録を作成することもある。	タブレットに入力されたデータをもとに、個々の排泄間隔を知り、トイレでの排泄を支援している。布パンツの方が3名、あとは紙パンツやパットなどを使用し、常時オムツの方も1名おられる。夜間のみポータブルトイレ使用の方もおられる。本人の状態に合った排泄用品を会議で細かく検討している。自然排便を促すために納豆、牛乳、ヨーグルトを毎日食す方もある。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	できるだけ食事、水分の摂取や運動にて対応行い、次いで主治医に相談し内服での対応をしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	お一人あたり週2回程、時間帯は主に午後を設定させて頂いているが、その中では時間の制限はせず、ゆっくりくつろいで頂けるようにしている。	午前午後を問わず、職員体制上可能であれば、できるだけ好きな時に入浴してもらっている。また、最低週2回であるが、入浴好きの方には増回もしている。湯を入れ替えたり、オーバーフローにしたり色々であるが、ゆったり入れるように時間を取り、レモンや柚子、入浴剤を入れて楽しむこともある。脱衣が億劫で拒否をされる方も湯船に入ってしまうと上機嫌になる。家族の用意したシャンプー類を使用する方もある。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	ご自分で入床・起床できる方についてはご本人の意思に合わせている。ご自分で表現できない方については表情や歩き方等からのサインを読み取り、お疲れの時は休んで頂くなど支援している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬剤情報を読み目的や副作用、用法や用量などについてよく認識するよう努めている。服薬時は十分な注意を払い、間違えないよう、日付や利用者様名を声に出して確認している。服薬後の様子は往診にて随時報告・確認できている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	家事の手伝いができる方には積極的に参加をお願いしており、役割が実感できていると思う。文化祭等での作品の政策や生き生きとした姿を引き出せるよう支援している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	天気の良い日は散歩や外気浴をしているが、遠出や個別ではなかなか出かけられていない。コロナの状況が緩和したので少しでも機会を増やしたいと思っている。	敷地内や、隣接の寺の境内も広く、近辺は自然に恵まれ、日常的に散歩の機会は多い。広い庭園のある家も多く、散歩途中に色とりどりの花を見て楽しんでいる。少人数で花や紅葉の車中ドライブにも行っている。家族と近隣散歩を楽しむ方、外出、外食、外泊をする方、病院帰りに食事を済ませてホームに帰られる方もある。墓参りや法事などへの出席もできるようになってきている。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	お金は施設で管理している。現状現金の所持や使用の支援はなかなか行えていない。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	家族からの希望で電話をご本人に受けてもらうことはしばしばある。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	季節の花をテーブルに飾ったり、季節の果物を収穫したり、各居室の表札に月替わりで変化をつけたりして、季節感を感じて頂けるようにしている。一人ひとりの生活に合った動線の確保や家具の配置なども工夫している。	3階エレベーター前のスペースは広々とし、横にソファが置かれている。玄関格子戸の前の壁に、利用者と職員が文化祭用に手作りした大きな花かごが飾られ、来客を迎えている。リビング内は全体に和の落ち着きがあり、障子をはめ込んだ広めの窓からは五山の送り火の鳥居の火床が見え、夏は間近に送り火が鑑賞できる。フロア内は明るく、対面キッチン、3卓のテーブル、ソファなどがゆったり配置され、ほとんどの利用者は1日の大半をリビングで過ごされる。体操をし、テレビを見、歌を歌い、洗濯物を畳み、会話を楽しみ、塗り絵やゲームなど、思い思いの過ごし方をされている。壁にはあまり展示物は貼らずすっきりさせ、広めの窓に映える周囲の自然を借景として、くつろぎの空間を演出している。食事時はテレビを消し静かなBGMを流している。大型の空気清浄機を設置し、定期的に窓を開けて換気をしている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	テレビの前のソファでゆっくりされたり、仲の良い方同市でおしゃべりされたり、基本、皆様思い思いの場所でくつろいでおられる。必要な場合は、職員がフォローに入り、一人ひとりの居場所づくりの支援をしている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	以前から使っておられた家具を継続して使っておられたり、思い出の品など飾っておられたり、馴染みのものを持ち込んで居心地良く過ごせるよう工夫している。	各居室入り口の表札には鯉のぼりの表札が掛っている。階により表札は利用者の手作り作品の場合もあり、月ごとにデザインを変えている。室内には、絵画やアートフラワー、テーブル、椅子、チェストなど馴染みの家具や置物、仏壇などを自宅から持ち込まれている。以前は仏壇に毎朝水を供える方もあったが重度化した現在ではされていない。余分なものを置かず簡素な住まい方をされている方もあり、本人の好みが尊重されている。居室にはエアコン、ベッド、大き目のクローゼットが備わっているが、自前のベッドや布団を持ち込まれる方もいる。ゆったりと緑の多い立地で、各部屋の窓から豊かな自然が眺められる。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	各フロア内は基本的に自由に動けるように過ごして頂いている。今日の日付や行事を掲示することで自分でわかることに繋がっていると思う。		